高体連会報
青春の躍動
発行
島根県高等学校体育連盟
TEL◇0852-26-3842
FAX◇0852-26-3695
発行人◇山崎　誠
編集◇高体連研究部
題字◇山本　興
印刷◇山本印刷

感動と感謝を胸に次のステップへ

島根県高等学校体育連盟
会長　山崎　誠

平素より本連盟の活動や行事にご理解とご協力をいただき誠にありがとうございます。今年度より、松江工業高校から松江東高校に事務局が移転し、約半年が経過しました。この半年の間に県総体やインターハイがあり、９月には県新人大会や特別国体も一部はじまったところです。今年度は、新型コロナウイルス感染症が５月８日付けで、「新型インフルエンザ等感染症」から「５類感染症」へ変更されたことを受け、県総体も、インターハイも、基本的な感染症対策は行いながらではあるものの、ほぼ通常開催になりました。

５月下旬から県内各地で開催された県総体は61回目となりました。還暦という概念に立てば新たなはじまりともいえる大会で、30競技に49校から５，６９３名の選手が参加しました。いくつかの会場を訪れましたが、久しぶりの応援や声援のもと、はつらつとプレーする選手の姿が印象的でした。

７月中旬には、インターハイ「翔びたて若き翼　北の大地へ　大空へ」のスローガンのもと北海道各地を主会場にして（山形、栃木、和歌山の３県で１一部競技を開催）開催されました。７月22日に札幌市の北海道立総合体育センター「北海きたえーる」で開催された総合開会式には、秋篠宮ご夫妻ご臨席のもとの有観客で実施され、島根県選手団の代表として松江工業高校の男子ソフトテニス部名が壮々と入場行進をしました。式典演武では、アイヌの伝統音楽から始まり、奏者全員が踊りながら演奏する北海道発祥の「ダンス＆プレイ」やチアリーディングが披露されました。高校生の熱演に感動しつつ「北海きたえーる」への入場から退場まで、挨拶からはじまって心をこめて歓迎する気持ちが伝わってくる素晴らしい総合開会式でした。

30競技に約３万人が参加したインターハイでしたが、島根県からも４７９名の選手が参加し、結果９競技32種目で入賞しました。ホッケー男女の横田高校、カヌー男女の出雲農林高校や島根中央高校をはじめ、剣道男子の大社高校、卓球男子の出雲北陵高校、柔道男子の開星高校、自転車男子の松江北高校や出雲高校などのめざましい活躍が連日新聞等をにぎわせ、県内高校生をはじめ県民のみなさまにも勇気と感動をもたらしたところです。

また、全国高等学校定時制通信制体育大会は、８月上旬に東京等を会場に行われ、島根県からも２校27名の選手が出場しました。

各大会に参加した選手のみなさんの労をねぎらいつつ、大会関係者や見守り育ててこられた保護者をはじめ関係のみなさまのご苦労ご尽力に敬意を表します。

スポーツや部活動の意義を再確認しながら、各専門部の円滑な運営や、２年後の中国総体２０２５、７年後の島根かみあり国スポ・全スポで島根県選手団が活躍できるよう、本連盟としても尽力してまいりますので、今後ともみなさまのお力添えをよろしくお願いします。

インターハイを終えて

横田高校　男子ホッケー部
主将　西村　洸希

私たち横田高校男子ホッケー部は、「挑戦者」を今年の年間目標とし、日々の部活に取り組んでいます。この目標は、昨年度高校タイトル三冠を獲得しましたが、今年は新しいチームで挑戦者として一から強いチームをつくっていくという思いを込めて決めました。

今年のインターハイは大会三連覇のかかった大会でもありました。プレッシャーがかかる中、本番の試合では、二回戦、準々決勝、準決勝と失点はありましたが、横田高校らしいホッケーで、チームの強みである守備からのカウンターやＰＣからの得点などで点を決めきり、大差で勝利していくことができました。

ですが、決勝戦では一二Ｑから失点が重なりました。また、得点のチャンスで点を決めきることができず、後半は全体的に前のめりな試合になり、カウンターからの攻撃を許すなど、試合の流れをつかむことができず、結果は無得点で敗れ準優勝でした。

今大会は準優勝という結果でしたが、優勝チームとの力の差を感じる決勝戦となりました。今年残された全国大会は国体と選抜大会の二つです。これらの大会に向けて、普段の部活から部員同士での話し合いやミーティングの時間を増やし、より一層部員一人一人がホッケーに対して真剣に取り組むようになりました。

残っている二つの大会で優勝するためにチーム全体で高めあい、強いチームをつくっていきます。応援ありがとうございました。

夢だったインターハイ優勝

島根中央高校　カヌー部
２年　吉村　颯人

今年の北海道インターハイは、私にとっては２回目となる大会でした。私は、昨年と同じカヤックフォアのメンバーとして出場しました。昨年は、まだまだ個々の力も不十分でパドリングを合わせることが出来なかったが、今年の北海道インターハイのカヤックフォアは、ひとり一人が高い競技力を持ち、全国大会のシングル種目に出場しても確実に上位に進出できる選手４人が揃いました。アジアパシフィック大会（ニュージーランド、世界ジュニアカヌースプリント選手権大会（イタリア）、オリンピックホープス（学年別世界選手権大会（ポーランド））の日本代表選手が乗った最強とも言うべき布陣が揃いました。

いざ、練習が始まると、個々のレベルが高いせいか少しの揃えや乱れが気になり、体重移動のタイミングがぴったり合わなければ納得できず、何度もぶつかり合いました。誰が、何番目に乗れば個々の能力を活かす事ができ、効率よく艇を進められるかを先生と一緒に考えました。何度も乗り替え、話し合い、最終的に私がトップ（一番前）を漕ぐことになりました。私は、このメンバーでインターハイでは、勝てるに違いないと思うと、緊張と楽しみでわくわくした気持ちでいっぱいでした。会場に入ってからも、コース状況を確認し、試合に向けて念入りに調整をしました。試合が近づくにつれ、４人の気持ちが１つになっていくのを感じました。

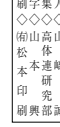
５００ｍの予選から全体のトップのタイムで勝ち上がり決勝では私たちの強みである、「後半の艇の伸び」ができ、２位に３秒近いタイム差で優勝することができました。最高に嬉しかったです。ゴールした瞬間、４人でハイタッチをして頑張りを讃え合いました。

２００ｍは２位に終わりましたが、来年に向けて課題も見つかり、やるべき事をしっかりやれば、結果は必ず出るという事を学ぶことができました。来年の大分インターハイでは、男子総合優勝を目指して、島根中央高校カヌー部一丸となって頑張りたいと思います。

翔び立て若き翼 北海道総体2023　入賞一覧

No.	成績	競技	種目	氏名	学校
1	1位	カヌー	男子カヤックフォア500m	島根中央	
2	2位	柔道	男子個人60kg級	田窪　剛共	開星
3		自転車	4km速度競走	寺本　将輝	松江北
4		ホッケー	男子	横田	
5		カヌー	男子カヤックフォア200m	島根中央	
6			男子カヤックペア500m	植出士虎 松本資輝プライアン	島根中央
7	3位	剣道	男子団体	大社	
8			男子個人	波多野　準也	大社
9		柔道	男子個人90kg級	山岡　大悟	開星
10		卓球	男子団体	出雲北陵	
11			男子ダブルス	佐藤卓斗 小野泰和	出雲北陵
12		自転車	3kmインディヴィデュアル・パーシュート	小林典宗	出雲
13		カヌー	男子学校対抗	島根中央	
14			男子カナディアンフォア200m	出雲農林	
15			男子カヤックペア200m	植出士虎 松本資輝プライアン	島根中央
16		ホッケー	女子	横田	
17	4位	カヌー	男子カヤックシングル200m	植出士虎	島根中央
18	5位	陸上競技	女子走高跳	江角菜子	大社
19		柔道	女子個人63kg級	中島千波	平田
20		卓球	男子シングルス	小野泰和	出雲北陵
21	6位	カヌー	男子カナディアンシングル200m	浦部　輝	出雲農林
22		ウエイトリフティング	女子64kg級クリーン＆ジャーク	猿木　雅	
23	7位	カヌー	男子カナディアンフォア500m	出雲農林	
24			男子カナディアンペア200m	浦部　輝 織田朔冶	出雲農林
25			女子カヤックフォア200m	出雲農林	
26			女子カヤックペア500m	多々納真桜 廣戸　舞	出雲農林
27			女子カヤックシングル200m		
28		ウエイトリフティング	女子64kg級トータル	猿木　雅	
29	8位	カヌー	男子カナディアンシングル500m	浦部　輝	出雲農林
30			女子カヤックフォア500m	出雲農林	
31		フェンシング	女子フルーレ	伊藤　杏	安来
32		ウエイトリフティング	女子59kg級スナッチ	有田しゅら	出雲農林

『決』



開星高校　柔道部
田窪　剛共

「決」これは私が今年の書き初めに書いた言葉です。高校生の集大成となる今年は、色々な事を決断したり、強い決意を持って生活することを目標に掲げてきました。

その中でも、自分にとって最も大きな「決」は、今まで成し得ることが出来なかった、日本一になる事でした。新型コロナウイルスの影響により、当たり前のようにできていた稽古が制限されたり、大会が中止になる悔しい経験もしてきました。そんな中、春の高校選手権柔道大会は必ず日本一になると決めて臨みました。大会では初戦から苦しい場面もありましたが、絶対に勝つんだと言う強い決意を持って攻め続けた結果、なんとか優勝することができました。今まで成し得ることが出来なかった日本一を決めた瞬間でした。

しかし、優勝を素直に喜ぶことはできませんでした。それは大本命の選手がこの大会を欠場していたからです。そのため、夏のインターハイではその選手に勝って、本当の日本一になるという新たな目標を決めました。目標を達成するために、今まで以上に食事、睡眠、トレーニング、練習など、日常のほぼ全てを柔道の為に捧げました。

迎えた試合当日は、初戦から得意の内股で順調に勝ち進み、大本命の選手との決勝戦まで勝ち上がりました。決勝では、今までの全てをかけて挑みましたが、結果は悔しく敗戦となりました。

この夏、私は本当の日本一を決めることはできませんでした。しかし、今までの努力は決して無駄ではなかったと思います。また、この経験によって、新たな目標を決めることが出来ました。これからは、目標に向かって、更なる努力を続けていきたいと思います。

初心

松江北高校　自転車部
３年　寺本将輝

速いスピードに魅了され年生の時に自転車を始めた。当時は風を切って走ることが楽しく、ウキウキしながらレースに臨んでいた。２年生の中国総体では優勝をして、多くの方に声をかけてもらい、とてもうれしかったのを覚えている。

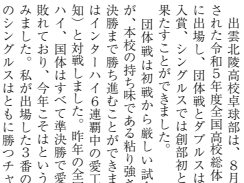
そんな中、秋に手首の骨を折り３カ月以上競技ができず苦しい日々が続いた。冬になり伸びを感じられなくなり焦りが募る中、３年春の県総体では思ったようなパフォーマンスが発揮できず、モチベーションも失いかけた。中国総体でも去年のチャンピオンとして臨んだものの自分らしい走りをすることはできず辛うじてインターハイの権利を得ることしかできなかった。３年になり周りの期待に応えなければと無意識にプレッシャーを感じていたのだと思う。

しかし、県総体、中国総体に上手くいかなかったことは最終的にプラスに転じた。気負うことがなくなりいつの間にか忘れていた初心を思い出し競技を楽しむことができた。それから今までになかった練習も楽しめるようになり、練習に励むことができた。インターハイでは予選、準決勝、決勝とどのレースも自分の良さを生かしたレースをすることができ、２位という結果を残せた。これは初心に返り新たな気持ちで自転車と向き合えたからだと思う。

ここまで自転車競技を続けられたのも、最後にいい形で終わることができたのも、周りの方々の応援があったからこそだと思う。感謝の言葉を伝えたい。

日本一を目指して

大社高校　剣道部
波多野　準也



私は「日本一」になるために大社高校へ進学しました。しかし、高校剣道は想像していたレベルより遥かに高く、日本一とは程遠いスタートでした。そんな中、昨年の高知インターハイで、いつも一緒に稽古している先輩方が個人３位ベスト８という結果を残されました。それを私は付き人をさせていただきながら、一番間近で見ることができました。その経験から「日本一」を近くに感じることができ、どのレベルまで到達すれば「日本一」になれるのかという明確な基準を持つことができました。日々の稽古でも先輩方に積極的に挑戦し、ボコボコに打たれながらも向かっていきました。また小村先生に対しても「どうしたら一本取れるようになるのか」と常に考え、研究しながら一年間稽古に没頭しました。そして迎えた今年の北海道インターハイ。最終的には団体戦・個人戦共に全国３位という結果を残すことができました。３位という結果は嬉しい気持ちもありますが、決勝の舞台を逃した悔しさと「日本一」には届かなかったという想いが強く残りました。

私は、自分から跳び込んで一本を取るというよりは、相手を引き出して打つ技を得意としており、今回のインターハイでは、団体戦・個人戦ともに持ち味を出せた、落ち着いた試合をすることができました。落ち着いて試合をすることができたのは、チームメイトのおかげです。今大会も大将の私に回ってくる段階で、不利な状況で回ってきたことがほぼありませんでした。そのおかげで、余裕をもって落ち着いた試合をすることができました。これは選手に入れなかった仲間も含めて、一人一人がお互いを信頼し、心から応援することができていたからであり、チームの団結力の強さを示していると思います。今回の結果は、決して私一人で成し得たことではありません。全ての方々に感謝しています。

今後は大学へ進学し、改めて「日本一」に挑戦したいと思います。

インターハイを終えて

出雲北陵高校　卓球部
佐藤卓斗

出雲北陵高校卓球部は、８月に北海道で開催された令和５年度全国高校総体（インターハイ）に出場し、団体戦とダブルスは昨年に続き３位入賞、シングルスでは創部初となる５位入賞を果たすことができました。

団体戦は初戦から厳しい試合の連続でしたが、本校の持ち味である粘り強さを発揮して、準決勝まで勝ち進むことができました。準決勝ではインターハイ６連覇中の愛工大名電高校（愛知）と対戦しました。昨年の全国選抜インターハイ、国体はすべて準決勝で愛工大名電高校に敗れており、今年こそはという強い気持ちで臨みました。私が出場した３番のダブルス、４番のシングルスはともに勝つチャンスがあり大いにありましたが、リードした時に勝ちを意識して消極的なプレーになってしまい、逆転負けを喫してしまいました。日本一を目指して本気で卓球に取り組んできただけに、試合後は３位に入賞した満足感よりも悔しい思いが残りました。全国大会５大会連続で３位に入賞できたことは誇らしいことではありますが、後輩には来年のインターハイで決勝の壁を破って、全国優勝してもらいたいと思っています。

私がこれまで大好きな卓球を続けてこられたのも、両親やチームメイト、学校関係者の皆さんが支えてくださったおかげだと思っています。これからも感謝の気持ちを忘れず、日本を代表する選手となれるよう日々精進していこうと思います。